

論コミ通信 2021年1月号

SFCフォーラムと中学高校大学をつなぐ情報紙



発行：
SFCフォーラム
論理コミュニケーション教育部門
2021年1月25日(月)
vol.9

実施校のみならず、あけましておめでとうございます。昨年は新型コロナウイルスによる休校等で学校運営が大変な中、「論理コミュニケーション」の実施に尽力いただき本当にありがとうございました。今年も引き続きよろしくお願いたします。

導入校一覧 2020年度 12月現在

今年度12月時点での導入校を記載します。2020年度は、全国52中学校・高等学校で、11,000人以上の中高校生が論理コミュニケーションを受講しています。※発行時点で記載許可をいただいた学校のみ載せさせていただいています。

～2017年度 導入	鈴鹿高校、長崎県立上対馬高校、北見藤高校、長崎南山高校、大阪薫英女学院中学校・高校、長崎県立西彼杵高校、長崎県立島原高校
2018年度 導入	長崎県立宇久高校、長崎県立壱岐高校、熊本県立東稜高校、熊本県立人吉高校、成蹊高校（東京）、和歌山県立星林高校、福岡県立須恵高校、福岡女学院高校、高岡市立伏木中学校
2019年度 導入	向上高校、自由ヶ丘高校（北九州）、高知県立高知丸の内高校、長崎県立猶興館高校、都立国分寺高校、福岡県立伝習館高校、武蔵野大学高校、西南女学院高校、大阪市立東高校、大阪明星学園明星中学校、横浜市立桜丘高校、神奈川県立希望ヶ丘高校、滋賀県立草津東高校（以下高岡市立）高陵中学校、高岡西部中学校、南星中学校、志貴野中学校、芳野中学校、国吉中学校、牧野中学校、五位中学校、戸出中学校、福岡中学校
2020年度 導入	金蘭会高校、長崎県立諫早商業高校、長崎県立川棚高校、大阪市立大阪ビジネスフロンティア高校、大阪市立南高校、早稲田佐賀中学校、四條畷学園高校、埼玉県立大宮光陵高校、神奈川県立川和高校、福岡県立糸島高校、山形県立米沢工業高校、埼玉県立大宮高校

全国の導入校が50校を超え、年間受講者も1万人を突破しました。富山県高岡市では、市内全中学校で論理コミュニケーション（中学生版8コマを遠隔授業にて）を実施、また優秀者が市内全域から選出され、「議論会」を行うなど新たな形もでてきました。一方、当初より学年や地域・進路にかかわらず多様な学校での導入が見られる点は変わりません。論コミの育成手法がシンプルでありつつも、奥深い学びであることを示しているように思います。（上野）



Question & Answer 2020

2020年度以降に頂いた受講者のみなさんから頂いた質問シートの質問と、その解答を抜粋してお伝えします。

Q-1: 事例で経験・観察を書く場合、そこで感じたことはいのでしょうか？

例えば、「～であった。そのため、～だと感じた。」のようなもの

A-1: とても良い視点・気づきですね。「自分が思った/考えた」ことを事例に書く形は、以下2パターンが観察されています。

■パターン1(証拠としても成立している場合)

根拠) 夏休みに学校に行くことが面倒くさいと思っている若者もいるから

事例) 私は20××年×月、夏休み期間中に学校に行ったが、その時とても面倒くさいと思った。

→この事例は、若者に自分自身が含まれていると考えれば、根拠の説明として成立しています。

■パターン2(証拠として成立していない場合)

根拠) インターネットを使うと誰もが簡単に議論できる。

事例) 私は20××年×月に、家でインターネットを使って買い物をしたのだが、その時「インターネットであれば意見が言いやすいかもしれないな」と思った。

→この事例は、本人の推測の域を出ず、根拠に書いたことが根拠の説明として成立していません。

このような二つのパターンがあることが観察されていますが、結論を単刀直入にいうと、「そのため～だと感じた」「～だと考えた」「～だと思った」などは、事例としての優先度が低いと考えてください。なぜなら「私はその時～と感じた」ということは、事実なのかかもしれませんが、それは読み手には確認のしようがないためです。読み手が「事実かどうか確認できない事実」というのは、事例の質としては良いものではありません。したがって、ほかの事例(例えば確かであることが第三者にも確認できるもの)を書くようにすることをお勧めします。

Q-2: 自分の経験・観察が他の人のも聞くと似ているなど感じ、特別感がないように思います。どうしたら、書く内容が濃くて違いがでるような文章が書けるのでしょうか。

A-2: 「特別」という言葉を辞書で調べると、「他と、はっきり区別されるさま」とあります。これを前提に回答すると、あなたの経験・観察をより正確に書くことができるようになれば、「特別」になります。なぜなら、同じような経験・観察を持っている人が周りにいたとしても、あなたの経験・観察はあなたの視点から書かれるはずだからです。今回の解答も、「他の人のも聞くと似ているなど感じ」たかもしれませんが、細部まで同じということはなかったはずですが、したがって、あなたの経験・観察を正確に書けば良いのです。ただし詳しく正確に書くという事が重要です。

例えばサッカー部の子が同じ練習試合をしたことを事例に書いたとしましょう。

A君は、「私は、いつも練習試合でパスをミスする。」

B君は、「×高校サッカー部では、毎週末練習試合をしている。私は、毎回の試合で必ず、試合ラスト20分になると、足元がふらつき、味方からのパスを自分の足元にキープすることができない。今シーズンの試合の前半におけるボールキープ成功率は×%ほどだが、後半になると×%となり、激減してしまっている。」

このように、「同じ練習試合を毎週末やっている」という事例ですが、書き方によってここまで変わるわけです。そしてA君のような事例の書き方をする中高生は少なくありません。ミスについて詳しく書けばB君のような「唯一無二の事例」になるのに、です。ここで気づいてもらえたかもしれませんが、一人一人の経験・観察は唯一無二のもので、でもそれはあなたが、自分の経験や観察を重要なものだと認識し、事細かに観察して初めて書けます。ぜひ上記の事例の違いを認識して、日常を細かく観察するようにしましょう。

Q-3: 事例に経験・観察を書いて、幼稚な文章にならないようにするポイントがありますか。自分で書いてみると、どうしても幼稚に(論理的でないように)思ってしまう。

(※以下の回答は、質問時の授業より後に学習する内容を加え再編集したものです)

A-3: まず、あなたがどのような事例を「幼稚」と判断したのか分からないのですが、事例に経験・観察を書くことは幼稚にはなりませんので自信をもって書いてください。なぜなら、論理コミュニケーションは大学での論述の手法に準拠しており、大学の研究でも「観察(経験を含む)」というのに行われているからです。ただし、事例に経験・観察を書く際に気をつけて欲しいことを二つ加えます。一つ目は、「いつ・どこで・だれが(なにが)・どうした」の四つの情報を「正確に」書くこと、二つ目は、「事例が根拠の証拠(エビデンス)になっているか」を確認することです。例えば、前述(A-2)の事例を以下のように設計図にあてはめてみましょう。

意見	根拠	事例	いつ	いつも(・練習試合で)
・持久力を向上させる筋トレを増やすべき	・試合の最後まで体力が続かないことがミスにつながると思うから	(A君の事例) ・私は、いつも練習試合でパスをミスする。	どこで	練習試合で (どこで行われた?)
			だれが/なにが	私は
			どうした	ミスをする

一つ目、「四つの情報が正確に書かれているか」を確認すると、A・B君ともに四つの情報は書かれています。ただし、A君に関しては「どこで」行われた練習試合なのかが不明確で、また「いつも」という表現も練習試合の状況は毎週異なるはずであり、正確に伝えきれない状態です。

(B君の事例)
・×高校サッカー部では、毎週末練習試合をしている。私は、毎回の試合で必ず、試合ラスト20分になると、足元がふらつき、味方からのパスを自分の足元にキープすることができない。……

	(1文目)	(2文目)
いつ	毎週末練習試合	(毎回の試合) 試合ラスト20分
どこで	(×高校・サッカー部で)	(×高校・サッカー部の) 毎回の試合で
だれが/なにが	×高校・サッカー部では	私は
どうした	している	足元がふらつきキープすることができない

二つ目、「事例が根拠の証拠(エビデンス)になっているか」を確認すると、今回、根拠では「試合の最後まで体力が続かない」ことを述べています。この点に関して、A君の事例では触れられていません。つまり、A君の事例はこの根拠の証拠にはなりません。しかし、B君の事例は、「試合のラスト20分で足元がふらつく…」と、体力が続かない状況について説明しており、この根拠の証拠になっています。事例に経験・観察を正確に書けるようになったら、次に「事例が根拠を説明できているか」を確認しましょう。

修正方法
事例(事実)に合わせて根拠を書きかえるか、根拠に合わせて異なる事例に書きかえましょう!

本年もよろしくお願いいたします (論コミ部門責任者 仁藤より)

みなさま、新年あけましておめでとうございます。

冒頭のあいさつにもあります通り、新型コロナ禍の中で多くの学校に論コミの学びを継続していただけたこと、厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、日々生徒の皆さんの論述文を採点している中で、今年度は特に「事例に事実を書き、根拠の証拠を示す」ということを理解し書かれている答案が増えていることを感じています。いまは採点担当としての実感程度でしかありませんので、年度末にデータとしてまとめて分析してみます。その結果、事実関係が明確になりましたら、皆様にもご連絡申し上げます。本年もなにとぞよろしくお願いいたします。

2018年度より、論理コミュニケーションを導入している長崎県立壱岐高校の実践について、当時(2018-2019年度)の様子をレポートとしてまとめていただきました。

また、執筆者の岩崎先生は、現在壱岐高校より長崎県立長崎東中学校へ異動されていますが、今年度も壱岐高校では、1年生が論理コミュニケーションを継続して学習しています。また、検定での成果も毎年向上傾向にあるため、今年度の取り組みについてもお伺いしました。

論理コミュニケーションの基礎力を身につけたのち、進路指導に役立てたいと考えている先生方は多いかと思えます。ぜひ参考にいただければ幸いです。



(「平成31年度壱岐高校学校案内」の写真より)

論理コミュニケーションの手法を就職指導において活用した事例

岩崎 道能

1. はじめに

長崎県立壱岐高等学校では、AO入試や推薦入試を受験する生徒が多く、高校3年次の志望理由書の作成に役立てることを目的に、年次進行で論理コミュニケーションを導入することとなった。初年度の2018年度は2年生で、2019年度は1、2年生で導入され、2年間で在籍するすべての生徒が論理コミュニケーションの手法を学んだ。以後、1年生が取り組むことを前提に計画が進められている。

2. 運用について

実際の運用にあたっては、DVDによる映像授業を実施し、3回の検定試験を受けた。授業中は担任と副担任が教室で共に学び、机間巡視を行って適宜、助言を加えた。授業はSFCフォーラムの研究者の方によって進められるため、教員は論理コミュニケーションに関する専門的な知識や、小論文指導の経験が乏しくても特に問題はない。ただし、生徒の状況を確認しながら声をかけたり、授業以外の様々な場面で例を提示することで、授業の効果が高まることは間違いないと実感している。また、論理コミュニケーションの手法を考査の論述問題等で用いることも可能である。

3. 実践例～志望理由書の作成について

2019年度、筆者は3年生の学級担任を務めた。この学年は、先述の通り2年次に論理コミュニケーションの映像授業を受講しており、3年に進級する前の春休みに論理コミュニケーションの設計図を用いて志望理由書のベースを作成させていた。

私が担任を務めた学級は、公務員試験を受験する生徒や就職試験に応募する生徒が多く、履歴書や面接カード、面接練習などで論理コミュニケーションの手法を活用できると考えていた。しかし、実際に生徒が作成した志望理由書を読むと、論理コミュニケーションの形を意識してはいるものの、内容としては不十分なものが目立っていた。たとえば、公務員を志望している生徒の中には、その根拠として「給与が安定しているから」「家族のために地元に残りたいから」など書いている生徒もいた。公務員という仕事に対する漠然とした憧れはあっても、そもそもどのような仕事があり、何が求められているかの理解が乏しく、そのため社会人として、公務員として何がやりたいのか、どのように責任を果たしていくかという視点に欠けるものばかりであった。

こうした問題は、志望理由書を書く目的を生徒と共有できていなかったことが原因であると考えている。志望理由書を書く目的のひとつは、(公務員や就職の採用試験においては)採用担当の方々に合否の意思決定をしてもらうことであるはずなのだが、生徒は自分の思いや考えだけを伝えることが目的になっており、そのため生徒の独りよがりな文章になっていた。『探究する大学と探究したい高校生をつなぐ志望理由書の書き方』(SFCフォーラム、2019)では、設計図を用いて受験生が探究したいことを明確にする一方、先行研究や研究者を調査するプロセスが紹介されているが、ここで紹介された後半部分の取り組みが疎かになってしまったことが原因の背景にあると考えている。たとえば公務員であれば、自治体の特色や抱える課題をきちんと理解していなければ、そこで何をやりたいのか、どのように貢献できるのかを考えることさえできない。こうした前提をふまえて志望理由書を作成するのは、当然のことではあるのだが、いざ書くとなると自分の思いだけが先走ってしまったり、志望する大学(自治体や企業)に対する憧れが強すぎて、自分の探究したいこと(働く目的や動機)がないがしろにされてしまうことも少なくない。筆者が指導した際は、生徒一人ひとりとの面談や添削でひとつひとつ問題点を指摘して解消していったが、先述の設計図を活用して「見える化」することで、構成を考える時点での解消につながるのではないだろうか。

4. 実践例～面接について

2019年度の学級では、面接指導の場面で最も論理コミュニケーションが役に立ったと感じている。特に、論理コミュニケーションのルール5の重要性について、指導の過程でしばしば気づかされることがあった。特に印象に残っている面接練習の場面を再現する。なお、内容は一部改変している。

筆者（以下：T）「あなたの長所はどのようなところですか？」
生徒（以下：S）「私の長所はどんなときでも前向きなところですよ」
T「どうしてそう考えますか？」
S「部活動でミスをして、それをチャンスだと考えるようにしていたからです」
T「ミスをチャンスと考えたんですね。具体的にどんなことがありましたか？」
S「試合でミスをしたことがあってとても悔しい思いをしたので、同じ失敗を繰り返さないように家に帰ってから何度も練習を繰り返しました」
T「どれくらい練習したんですか？」
S「近所に住む友人と一緒に、できるようになるまでやりました」
T「実際にできるようになったのですか？」
S「必ずしもできるようになることばかりではありませんでした。でも、決してあきらめず練習を続けました」

ここで生徒の思いが最も伝わったのは、「できるようになるまで繰り返し練習した」という部分であった。論理コミュニケーションを学ぶまでは、我々教員も生徒の側も、「どんなときでも前向きである」という主張にこだわり、その具体例を探しがちであった（たとえば、「落ち込んだときにどんなふうに考えるように心がけていたのか」などと面接後の振り返りで質問したりする！）が、論理コミュニケーションのルール5に照らせば、「家に帰ってから何度も練習を繰り返した」という具体例から想起される本人の特長を主張することの方が自然である。

そこで、生徒とともにあらためてルール5を確認し、事例をもとに長所をまとめ直すことにした。その結果、生徒自身が「簡単には諦めない粘り強さ」が自らの持ち味であると認識し、自己PRを練り直した。部活動での体験と主張が合致した自己PRであるから説得力は十分である。また、主張と体験のずれが解消されたことで、意図しない追質問を避けられる（「前向き」に関する質問）という効果もあったと考えている。

5. まとめ～その他の効用

以上が、志望理由書および面接指導に論理コミュニケーションの手法を応用した実践の一部である。導入後2年目の実践例であるから、生徒はもちろん指導者も手探りの状況である。指導のゴールを迎えた経験がないので、うまく進んでいるのかもわからなかった。SFCフォーラムの井上孝志先生からは、実践の先輩という立場から細やかな助言いただき、大変勇気づけられた。心より感謝申し上げます。なお、実践に関わった他の教員からは、論理的な文章を書く、話すことができるようになるという効用以外に、「意見」「根拠」「事例」といった用語を教師と生徒が共有したことで、スムーズな指導につながったという意見があった。筆者自身も強くそれを認識したことも付記しておきたい。

2020年度も、壱岐高校の実践は続いています。論述力検定で最終的に総合評価Aに達成する者も増加していたため、今年度ご担当の浦田先生（国語科）に、取り組みの際の工夫を伺ったところ、「第3回検定の一週間前に、「復習の時間」を1時間とり、その復習日の学年朝会で、論コミに行かれる先生方に、以下の内容を記したプリントを配付した」ということでした。

<配付したプリントの内容>

- I. 第1回と第2回の結果を見比べて、各評価の【どこが上がったのか/下がったか/変わらなかったか】を確認させてください。
- II. 「上がった理由」「下がった理由」「変わらなかった理由」を、検定の時に配られた資料一式や、2冊の冊子を使って、自分で考え、調べるようご指示ください。
- III. I、IIを踏まえて、次回最後の検定で自分が気をつけるべきポイントはどこかをはっきり意識し、忘れないようにメモをとっておくようご指示ください。

※論コミで鍛えられる「論述力」は、将来の入試や各種試験で生きるだけでなく、社会人になってからも役に立つものであることを、先生方から今一度ご説明いただけると有り難いです。

コロナ禍で急拡大した「遠隔教員研修」「遠隔授業」の現場から（教員研修担当 井上より）

今年度は「COVID-19（新型コロナウイルス）」感染拡大のため、夏休み以降の教員研修・授業は全て「遠隔（主にzoom）」での実施、そして昨年度まで対面実施の要望も多かった「生徒オリエンテーション」は、現場の先生によるオリエンテーションに切り替えて頂きました。

当初、「教員研修」を実施するに際し、直接触れあうことない形で成果が上げられるのかが不安でした。しかし、担当の先生方が、事前の協議や遠隔テストだけでなく、当日も十分に準備をして臨んでくださったことで、対面と変わりなく実施できました。zoomでは、①アップデートが行われていないと会議室に入れない、②複数クラス参加の場合に、一部参加が遅れ全体の時間が短縮される、といった問題はありましたが、これは遠隔に慣れれば解消することです。後は、先生方からの質問が対面時より少ないという点が課題かと思えます。ただ、事後の担当の先生からの報告を見る限り、教員研修は概ね好感を持って受け止めて頂いたようで、対面と余り変わらぬ成果があったということで、少し安心しております。

こういう事態の中で、遠隔による教員研修や現地対応のオリエンテーション、そして研修・授業では論コミ担当の先生方に加え遠隔に習熟していらっしゃる先生方を併せて配置し、スムーズに進行できるように配慮してくださった各学校に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。